Kwansei Gakuin University

受難への道を歩むイエスと弟子たち・ユダヤ人指導者・群衆について

――マルコ福音書八章一一節～九章一三節の編集史的研究[1]――

加藤善治

はじめに

本稿では、マルコ八・一一～九・一三を手がかりに、受難への歩みを始めるイエスに対する弟子たち、ユダヤ教指導者、そして群衆たち[2]の性格と関係を考察しようとする。この三者の性格と関係の解明が、マルコ福音書の本質的な部分に光をあてると思われるからである。

なお、本稿は、参考文献を広く読まないで、テキストそのものの考察の中から、論を進めた。その意味で、不完全なものに留まっている。[3]

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

一、マルコ八・一一～二一

1　伝承と編集の分析

次のような編集者マルコに特色的な動機がこの部分全体の中に見いだされる。(1)八・一三、一四の船による渡航の動機、[4] 及び(2)八・一六の弟子たち相互の議論の動機は、マルコの編集に特色的なものである。(3)マルコの編集文である六・五二にあった弟子達がパンのことを理解しなかった、及び彼らの心が固くなっていたという動機が八・一七以下でも用いられ、その際に、ここでもそこと同じ noein と sunienai が使用される。更に(4)八・一九、二〇においてマルコが先に配置した二つの給食物語が取り上げられ、それについて話題にされている。従って、この部分には編集者マルコの手が大幅に入っていると判断できる。

利用された伝承素材としては八・一一～一二にQの「ヨナのしるし」についての伝承（マタイ一二・三八～四二／ルカ一一・二九～三二）と類似のアポフテグマが推定される。八・一五のパン種についての言葉も、パン動機以外は、内容的に文脈から浮き上がっており、独立の伝承が考えられる。なお、パン種の動機はマタイ一三・三三など、各所に現れるものである。

マルコは福音書前半のキリスト論の展開、特に二つの給食物語で準備したところをこの部分で集約し、後半のキリスト論の展開へとつなごうとしているのであろう。[5]

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

2　パリサイ派のしるし要求とその拒絶（八・一一～一二）

アポフテグマ導入部の peirazontes auton は一〇・二におけると同様にパリサイ派のイエスと敵対する姿勢を明白にするものであり、マルコの挿入であろう（一二・一五も参照）。ここに三・六でマルコが二章からの一連のイエスとパリサイ派の対立を描くアポフテグマ集の結びに書き記したところのパリサイ派のヘロデ党と共謀したイエスを殺そうとする計画が始まったことを報じる重要な記述がここに引き継がれ、更に十・二を経て受難物語[6]へと導いていくマルコの編集の意図がうかがえる。

3　パリサイ派とヘロデのパン種に対する警句（八・一五）

パン種についての言葉のうち、tes zumes Herodou は、マルコの付加であろう。この言葉はマタイ、ルカによって理解されなかった。[7] しかしマルコ福音書の中でこのパリサイ派とヘロデ乃至ヘロデ党は、イエスを殺すという意図を共有し、そのために一緒に働く者たちとして他に二箇所において言及されているからである。即ち、マルコは三・六で、イエスを殺すことが「パリサイ派とヘロデ党」の間で協議されたと記し、更に一二・一三でエルサレムの最高指導者のイエス殺し決定（一一・一八）を受けた指導者達とイエスの直接的な対決（一一・二七～一二・一二）が不発に終わった後、その指導者達がイエスを捕らえる口実を求めて派遣するのがパリサイ派とヘロデ党としている。

従って、パリサイ派とヘロデ党はマルコでは三・六のイエス殺しをめぐる秘密協議の後、イエス殺しを一貫して意図する者達と考えられている。八・一一及び十・二の peirazontes auton の中にもマルコの構想の中ではこの意図が

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

前提されているとみてよい。

パリサイ派とヘロデのパン種に注意しろとは、するとマルコにとって今は秘められた小さなものであるが、やがてイエス殺しという大きな出来事を引き起こしていく彼らの意図に対する警句となる。いわば、これは八・三一の受難予告に先立つ、隠された言葉での受難予告ということができる。

4　弟子たちの無理解に対するイエスの叱責（八・一四～二一）

弟子達はその無理解を叱責されているが、その叱責は以下の点で単に彼らを批判して終わるものとは思われない。

(1)八・一七～二一の弟子たちに対する叱責の言葉はすべて疑問形で作文されており、従って彼らの無理解を批判的に断定するものではなく、批判を通して彼らの理解する応答を求めるものといえる。

(2)八・一七b及び八・二一の無理解叱責の言葉は"oupo"（まだ…ない）を伴って作文されており（oupo noeite oude suniete;及びoupo suniete;）、それによってここでのイエスの弟子叱責全体は「まだ理解しないのか」の言葉によって始められ、そしてそれによって終えられていることとなる。

(3)四・一～三四と七・一～二三においても弟子たちはその無理解を叱責されても、それでもユダヤ教指導者達だけでなく、群衆一般からも区別されて、「譬え」の意味の解き明かしへと導き入れられている。

四章でイエスが譬えで群衆を教える場面では、群衆はakouetoによって「聞く」ことが要求されている（四・三、九、二三、二四）。その群衆への教えの合間に四・一〇以下において「一人となったとき」、つまり群衆一般から離れたときに、三・三一～三四での言語用法を受けて、hoi peri autonが一二人と一緒に譬えについて尋ね、それに対し

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

てイエスが、「あなた方」には、つまり一二人とまわりの者たち（四・三四では「自らの弟子たち」）には神の国の秘密が与えられているが、hoi exo には、つまり彼のまわりにいない外の者たち（三章では外に立ってイエスを呼ぶ彼の肉親たちとエルサレムからの律法学者）にはすべてが譬えで生起すると答える。従って四・一三で譬えを理解しないことが叱責される弟子たちは、それでも群衆一般を含む外の者たちと明確に区別され、四・一四〜二〇において譬えの意味の解き明かしへと導き入れられていく（四・三三、三四も参照）。

七章ではパリサイ派とエルサレムからの律法学者との厳しい対論が展開された後、七・一四〜一五でまず群衆が召喚され、ここでも akousate によって「いっさいを私に聞き、そして理解せよ」と呼びかけて、鍵になる一五節の言葉が語られる。続いて「家の中に入ったとき」というマルコの典型的な秘密の教えのための状況設定に更に「群衆から離れて」を加える入念さで、群衆一般から区別された弟子達のための秘密の教えの場面（七・一七〜二三）が設定されている。そしてここでも七・一八で「そのようにあなた方も無理解（asunetoi）であるのか、…ということが分からない（ou noeite）のか」と一方で弟子達の無理解が叱責されながら、他方で彼らには言葉の意味が丹念に説明されていく（七・一九〜二三）。

ここで注目すべきは七・一七で、イエスが群衆に語った一五節の言葉がマルコによって「譬え」（he parabole）と表示され、それによって四章と同じく、イエスが群衆一般には譬えを通して語り、弟子たちには秘密の内にその意味を解きあかすという関係が成立していることである。

(4) 七・一八の旧約引用による弟子たちの叱責は、四・一〇〜一二における「外の者たち」に向けられた同様の批判と類似する。しかし両者の間には重要な相違がみられる。四・一二はヨハネ一二・四〇及び行伝二八・二六〜二七同

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

様に七〇人訳イザヤ六・九以下を引用するものであるが、行伝及びマタイ平行箇所と違って hina … me 及び mepote による導入によって、批判の相手を厳しく排除するものとなっている。これに対してイザヤ六・一〇とも関連する「心が固くなる」ことの指摘に続く八・一八の弟子達に向けられた言葉はエレミヤ五・二一及びエゼキエル一二・二を反映するが、それは八・一七〜二一の一連の疑問形でのイエスの弟子達への言葉の一つとして同様に疑問形で作文されており、従って断定的に弾劾して終わるものではない。むしろ六・五二と同様に一方でイエスの奇跡を自分の目で見、イエスの宣教を自分の耳で聞いても理解しない弟子達であるが、イエスは叱責しながらも、問いかけ、そして一九節から二〇節の問いを通して彼らを丹念に理解へと導いていく。

するとイエスの疑問形での一連の問いかけが八・二一の oupo suniete の問いで終わっているのは偶然ではない。イエスは彼らの理解に基づく応答を求めておられると言うことができ、また実際にマルコの構想の中でも弟子達のそのような応答が必要とされよう。

二、マルコ八・二七〜三三

1　伝承と編集の分析

マルコの編集上の手が加えられていると判断できるのは以下の箇所である。(1)八・二七aの場面設定。(2)八・三〇のイエスの弟子達に対する沈黙命令。(3)八・三一aのうちの kai erxato didaskein autois。更に恐らく(4)八・三二aの kai parresia ton logon elalei。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

しかしこの部分でマルコが利用した伝承の確定は大変に困難である。

八・二七b～二九のイエスと弟子達の問答は一般にはペテロのキリスト告白を伝える伝承素材と見るべきである。しかし八・二八の人々のイエス理解では列挙される人物もその順序も六・一四～一六と同じであり、更にイエスは洗礼者ヨハネであるという意見も、六・一四のように復活したヨハネと関係させて初めて意味を持つものである。従って、八・二八は六・一四以下を編集者が短縮したものである可能性は一概に否定できない。

八・三一の人の子の苦難と復活の予告は、そこで列挙されるユダヤ教指導者の順番が編集文をも含む他の箇所[8]とは異なり、伝承である。

八・三二～三三も伝承とされるべきであるが、そのためにはペテロがイエスを叱責する契機となる何かが先行しておらねばならず、受難予告は適切であるが、すでにマルコ前に両者が組み合わされていたかは疑問である。逆に、編集文である三〇節の沈黙命令で使われたepitimanが二度も繰り返されること、第二、第三の受難予告に対してマルコが弟子の無理解動機を編集的に加えていること、人間と神との対比が一〇・二七のマルコの文にも見られ、更に受難に関連したこの対比はイエスのゲッセマネの祈り（一四・三六）と対応することなどから、マルコによる創作の可能性も残されるべきである。

2　人々のイエス理解とペテロのキリスト告白（八・二七～二九）

人々のイエス理解はマルコにとって的外れである。洗礼者ヨハネはマルコにとって福音書冒頭におけるマラキ三・一引用におけるmouのsouによる置き換え、イザヤ四〇・三のtou theouのautouによる置き換えによって、更に

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

一・七のヨハネ自身の証言によって、明白にイエスの「先駆者」として位置づけられている。更にヨハネとイエスの苦難の運命はマルコによって平行するものととらえられているが、しかしその際も惨殺されたヨハネのto ptomaは彼の弟子達によって墓に葬られてとどまるが（六・二九）、イエスのto ptomaはマルコの編集文である一五・四四、四五において彼の信奉者に引き渡され、墓に葬られて後、彼は甦らされて墓には留まっていない。マルコは両者の間に本質的な相違を見ている。

エリアはマルコでは九・一一、一二aで終末の前に必ず来るべき者として、一五・三五、三六ではメシアを同伴する者として言及されているが、しかしマルコは九・一一～一三においてそのエリアを暗に洗礼者ヨハネと同定している。従って来臨のエリアとしてイエスを理解することはマルコにとって妥当しない。預言者達の一人というのも同様であろう。

それに対してキリストとしてのイエス理解はマルコにとって適切である。福音書の第一文は「イエス・キリストの福音の初め」となっていること、更に一四・六一で大祭司がイエスに対してキリストであるか否かを問い、イエスはそれを肯定していること、そしてその問いの文章は疑問文であることを除けばペテロの告白と同じものであることから、正しいイエス理解であると言える。

八・二一のイエスの「まだ分からないか」という問いかけは弟子達の応答を求めていた。今、それとの関連で、ペテロのキリスト告白は彼がイエスの問いかけに対して弟子を代表して、まさにイエスが誰であるかについて、一応、正しく応答したものであると言うことができる。従って、ペテロのキリスト告白は福音書前半のパンの奇跡を頂点とするキリスト論的構想の完結であり、ここに福音書前半が主に奇跡物語を通して示したイエスのキリスト論的な秘密

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

を弟子たちが理解したことを示している。この点で、イエス理解におけるペテロと弟子達の群衆に対する優位は明白である。

3　弟子達の新しい無理解と沈黙命令（八・三〇、三二～三三）

まず、弟子たちの無理解動機について考える。マルコ福音書の後半は、ペテロのキリスト告白によって到達した弟子達のイエス理解は形式的には正しいが、しかし彼らはイエスがどのような意味でキリストであるかを全く理解できないことを繰り返し明らかにしていく。彼らの求めるキリストはエルサレムで栄光の座につく方であり、イエスがそれと反対に受難の道を歩む方としてこそキリストであることは彼らには全く不可解であり、その後に従っていくことはできない。

この無理解を最初に示すのがペテロのイエス叱責とそれに対するイエスのペテロ叱責である。しかし、弟子の無理解は単に彼らの理解の無能性と問題性を示すのではなく、イエスが受難者としてこそキリストであるという神の秘義が人間的な理解の可能性を超えていること、そしてそのようなイエスの後に従うことは人間的な意志の可能性の中にはないことを表現していないだろうか。

実際に八・三二～三三では受難を回避しようとすることが人間的な思いであって、神に反するサタン的な行為であるとされ、受難の道を歩むことが神の意志とされている。同じことが受難物語、特にゲッセマネの祈りの中で示されている。そこではイエス自身が自分の意志としては受難の運命の回避を願いつつ、しかし神の意志としてそれを担おうとされる。そこに受難は人間的には理解できず、できるなら避けたいと思わざるをえないものであることが示され

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ている。キリストの受難はやはり神の秘義である。

イエスに従って生きるということも、それを主題化した一〇・一七〜三一の中の、特にマルコ自身の文章である一〇・二七において人間的な可能性ではなく、神の力にあずかって初めて可能となる出来事として打ち出されている。

従ってペテロのキリスト告白のあと、イエスが受難予告を通して受難への歩みを明確にされて以来、弟子の無理解は受難者の中に神の意志を担って生き、死んでいくキリストを見いだすことをめぐる新しい段階に入っているということができる。

次に、弟子たちへの沈黙命令はどうであろうか。八・三〇の沈黙命令は一・四四や七・三六のそれと違って、命令が破られることの言及につなげられておらず、従って奇跡物語の中で悪霊や人格化された自然の驚異に対してなされる強圧的な沈黙命令、特に編集文である三・一二と比較できるように思われる。しかしここで弟子達に向けられた沈黙命令は悪霊に対するもののように単に黙らせることを目的にしていない。

この沈黙命令は第一には福音書後半のキリスト論的構想に基づいてペテロのキリスト告白とイエスの受難予告を結びつけることをし、後者なしに前者が公にされることは回避されるべきであるというマルコのキリスト論的主張の表現である。(9)

第二に、この沈黙命令は同じくマルコの作文した九・九の沈黙命令とマルコにとって相互に関連するものと思われる。それは九・九の ei me hotan 文が八・三一の受難予告から主語の「人の子」と結びの「復活する」(anistanai)を引き継いでおり、更にやはりマルコが挿入したと判断できる九・一二b も polla pathein や聖書の成就としての人の子の受難の必然性の理解などの点で受難予告を反映しているからである。なお、exoudenein の使用は受難予告の

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

中の他の要素をこれによって要約したものと判断できる。すると八・三〇の弟子達への沈黙命令はマルコにとって初めから復活の時までという期限づきのものであり、悪霊に対するもののように、ただ黙らせることだけを目指してはいない。

4　イエスの受難予告（八・三一）

この最初の受難予告の特色は第一に人の子の苦難と復活を dei（必ず…起こらねばならない）と捕らえていることである。これは受難物語でいわれる「人の子は彼について書かれているように去っていく」（一四・二一）、「聖書が成就するため」（一四・四九）と同じように、受難と復活は聖書の成就として神の定めた必然であるとする理解であろう。すると九・一二bとも相通じている。

第二の特色は人の子の死を「長老達と祭司長達と律法学者達によって捨てられる」ことと捕らえる点である。この三者はエルサレムの最高議会を構成する者達であり、そのような者として受難物語の中で（列挙の順序は異なるが）登場している。[10] イエスの死は従ってユダヤ教最高指導者達によってもたらされた出来事として捕らえらている。この点は特にマルコの編集の段階で重要なこととして押さえられており、それは私たちが八・一一以下、八・一五で見た所ともつながっていく。マルコは従ってガリラヤとエルサレムのユダヤ人指導者達をイエス殺しの直接の責任者として明らかにしているのである。なお、この関連で「捨てられる」(apodokimasthenai) は、このイエスを殺そうとする三者に向けて語られた「譬え」（一二・一～九）の後に置かれた詩篇一一八・二二の「家造りらの捨てた石」と同じ言葉であり、そこでは捨てられることは神の出来事としての復活へとつながっていることが、この受難予告でも伝承

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

形成の段階で反映しているかもしれない。

この受難予告は第三に苦難と死の悲惨の中に下っていくことの予告であるだけでなく、同時に苦難と死を通して復活へとつながっていくことの予告である。しかも「人の子」はマルコにおいて終末の完成をもたらす栄光の審判者である。[11] 従って受難予告はいわば下降を経て再び高みへと上昇していく上昇の線を描き、受難者が復活し、やがて栄光の審判者として来臨することまで射程にいれている。そしてマルコもこの上昇の線を重要なことと認識している。そう考えて初めて、受難予告の後に八・三四以下の教説、更に変貌物語（九・二以下）、変貌とエリアについての問答（九・一一以下）が配置されることも理解できるからである。[12]

三、マルコ八・三四～九・一

1　伝承と編集の分析

この部分ではマルコの編集の手が入っていると思われる箇所は多くない。考えれるのはまず、八・三四aの弟子達とともに群衆を召喚する状況設定場面である。[13] 次に、八・三五の tou euaggeliou は、伝承の中にあった heneken emou に二次的に付加されたものと判断できる。[14] 恐らく九・一aの kai elegen autois も、すでにマルコ以前にまとめられていた八・三四b～三八のイエスの言葉集に九・一のもう一つの言葉を付加するために用いられた導入句である。[15]

八・三四b～三八の言辞のうち多くはQ伝承と平行しており（マルコ八・三四b～三五＝マタイ一〇・三八／ルカ

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

一四・二七＋一七・三三、マルコ八・三八＝マタイ一〇・三三／ルカ一二・九）、それらはすでにマルコ以前に一まとまりにまとめられていたと推定される。九・一の言辞の接続は、新しい導入文が付されているので、二次的であり、恐らくマルコ自身による。

2　弟子とともに群衆を召喚する理由（八・三四ａ）

ここにある言辞にはまず、以下のような特色が見られる。まず第一に、八・三四ｂ～三八に集められた言辞は、Ｑにはない三六節、三七節なども加わり、イエスに従って、彼のために生命を失うことは、生命を得ることであると語る。一まとまりにされた言辞集の結びとなっていた八・三八は、Ｑのルカ一二・九では地上と天上との対比の中で捕らえられているが、終末論的性格は明白ではない。それに対してマルコの方ではhotan文（聖なる天使達とともに彼の父の栄光の中に来るときに）を通して、言明の終末論的傾向が明らかにされる。更にこの傾向は神の国の遠くない将来における到来を告げる九・一の付加によっていっそう強められている。

次に、八・三五の言辞への「福音のために」の挿入によって、イエスの後に生命を賭して従うことは、地上のイエスの十字架の道を従うことから、マルコ一三・一〇と同様に、彼の復活後、再び彼の来るのを待つ教会の状況の中で彼に従うことへと拡大されている。一連の言辞は従ってイエスが人の子として再び来るのを待つマルコの教会の人たちに対して直接語りかける性格をも与えられている。

以上の点は、八・三四～九・一のイエスの言葉を、イエスが受難の開始を前にして、残していく弟子達の代表に、彼の死後、彼が再び来るまでに起こるべきすべてを語り、それによってそれまでの期間に彼のために生命を賭して生

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

きることを通して福音を全世界に宣教しながら彼を待つことを求めることとなっているマルコ一三章と比較することを許そう。この比較が許されるなら、一三章のイエスの言葉が四人の弟子を通して「すべての人に向けて」語られていたように（一三・三七）、ここでのイエスの言葉も、すでにイエスの後に従っている直接の弟子達だけでなく、すべての人に開かれている必要性がある。それがここでイエスが弟子たちと並んで群衆を召喚する理由ではないだろうか。そうすると四章及び七章でイエスが群衆を弟子と区別しながらも「聞く」ことへと呼びかけたように、群衆はユダヤ教指導者達と弟子達の間でまだ中立的立場にある存在であり、彼らの中からイエスの「まわり」に集まって彼に聞く人々と、あくまで彼を拒否して、交わりの「外に」留まる人々が分化していく存在として理解できる（三・三一～三五参照）。

3　受難予告とイエスの言葉と山上の変容との関連

この一連のイエスの言葉の中にある、生命を失うことが逆に生命を得ることになる、という逆説は、すでに受難予告の中にあった人の子の運命の逆説、即ち受難と死は復活を通して彼の終わりの日の来臨の人の子としての栄光につながるという秘密と通じている。従って、イエスのここでの教えは受難予告にあずかることから厳しく排除されている群衆に対する、[16] ある意味で隠された言葉を通しての彼に従って生きることへの招きということができる。それはちょう四章と七章における群衆に対する譬えでの教えと似ている。[17] すると続く変容物語は、受難予告を通して語った彼の秘密、及び群衆に対して語った逆説、即ち生命を失うことは新しい栄光に満ちた生命に生きることにつながるという論理の真実であることを秘密のうちに弟子の代表者三人に示した出来事ということができる。いわば四章と七章

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

の群衆に向けて語った「譬え」の意味の弟子達に対する特別な解き明かしの関係に対応するものということができる。そうすれば「六日の後に」とか「高い山」という、すでに変容物語伝承と結びついていたはずの動機も、マルコにとって群衆からの隔たりと教えの秘密性を強調する動機として意味を持ったはずである。

四、マルコ九・二〜一三

1　伝承と編集の分析

マルコの編集の手が想定できるのはまず九・九、一〇の沈黙命令とそれに続く弟子の間の議論の記述である。沈黙命令はマルコに特色的なものであり、[18] この沈黙命令の作文自体も八・三一のの受難予告を模した可能性があり、[19] また弟子の間の議論は無理解動機の典型的なものであるからである。[20]

更に九・一二bも次のような理由でマルコによる挿入と判断できる。まず、先駆者としてのエリアをめぐる質問（一一節）と答え（一二a、一三節）の間で、関連なしに言われる人の子の運命についての記述は、脈絡を乱している。次に、文体的にも一二a節と一三節は…men…alla…の構文でまとめられているのに対して、一二b節は異物のような印象を与える。更に人の子の苦難についての文章は一方で一三節のエリアについての kathos gegraptai epi auton と共通し（両方ともマルコの付加?）、他方で八・三一の受難予告と polla pathein で一致し、それは八・三一（と九・一三）に従って作文されたものとみなしうるからである。

するとマルコの利用した伝承素材は変容物語（九・二〜八）と弟子との会話を内容とするアポフテグマ（九・一一

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

〜一二a、一三）である。

2　弟子達に対するイエスの終末論的栄光の姿の開示としての変容物語（九・二〜八）

変容物語の個々の動機はモーセ物語と関係し、恐らくそれとの関連で成立したものと推測される。しかしその動機を用いながらもイエスの天的本性、旧約聖書の二人の主要な人物とも比肩されるだけでなく、神から直接に神の子と宣言されるイエスの特別性が開示される独自なキリスト論的物語となっている。

その際に注目すべきは、このイエスの本性の開示は弟子達に対する出来事となっていることである。「彼らの目の前で」イエスの姿が変わり、「彼らに対して」エリアがモーセと一緒に顕現し、わき起こった雲は「彼らを」包み、その中から「彼らに向かって」、「これは私の愛する子、彼に聞け」との言葉が響いてくるのである。するとこの物語はマルコの文脈の中では、当時の、そして弟子達のキリスト像に反して、十字架への道を歩んでいくイエスこそが復活を通して、やがて来臨される栄光の終末論的審判者であるという、あるいは生命を捨てることが逆に生命を得ることにつながるという、いわば理解しがたい逆説を突きつけられた後に、その二つの告知の真実であることの天的な証言として、機能している。終わりの日に人々の前に明らかにされる彼の栄光がすでにここで弟子達に対して明らかにされているのである。

3　イエスの復活と弟子達のイエス宣教の始まり（九・九、一〇）

弟子達に「見たこと」を人の子の復活するときまで物語ることが禁じられる。それは逆に、彼の復活の時に、彼ら

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

が見たことを物語ることがゆるされ、それが始まることを意味していないだろうか。いわば、イエスの復活が、受難の道を歩むキリストに対する弟子達の本質的躓きを克服させ、彼らが全世界に向けてイエスを宣教することが始まる時となるのである。

この理解を支持する論拠はマルコ福音書の中に色々見いだされる。例えば、まず、(1)マルコ一四・二八、一六・七は、弟子たちがイエスに従っていく道が、イエス受難に直面して一度は完全に挫折したにも関わらず、イエスの復活とともに再び新しく始まっていくことを告げている。

次に、(2)マルコ一三・一〇は、イエスの死と復活の後、福音がイエスの故に迫害を受けながらも、証言を続けていく人々によって全民族の間に宣教されていくことを語る。[21] そして、そのことを告げられ、そのような彼に従って生きる道へと招かれているのは直接には四人の弟子たちであるが、しかし一三章のイエスの教説はまさに目を醒まして彼の再び来るのを待つ「すべての人々」に向けて語られている（一三・三七）。この四人の背後にいるすべての人々を、四人の弟子が代表する弟子たちと理解することは正当であろう。

更に、(3)マルコ一五・三九のローマ軍百卒長による死んでいくイエスに対する神の子告白は、マルコのキリスト論構想の中で決定的に重要な意味を持つが、その告白は過去形により「神の子であった」ことの証言となっている。更にこの人は一五・四四、四五のマルコの挿入文の中で、もう一度、イエスの死の証人として登場させられている。このことは、彼はあくまでもイエスの復活以前の、彼の死の証人に留まること、復活後の、今も生きて働き、やがて来る救い主としてのイエスの宣教の担い手はあくまでも弟子達であることを示すものであろう。[22]

この他にも、一〇・三九にあるゼベダイの子ヤコブとヨハネの復活節後の殉教の運命の預言も、十字架への道を歩

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

むキリストを理解できず、イエスに従うことに完全に挫折した弟子たちが、復活節体験の後で、もう一度、イエスに従う道を歩み出すことを示唆している。

従って、イエスの「まだ分からないのか」との問い（八・二一）に対して、弟子達が真実に分かりましたと答えることができる時が、それ故にイエスの神の子としての秘密を告知することが許される時が、彼らの復活節体験の中に始まると言ってよいだろう。復活という神の偉大な力の出来事が彼らに受難者の中にキリストを見いだすことと、苦難の道を自らの十字架を背負って彼に従うことを可能とするのである。

4　ユダヤ教指導者に対する批判（マルコ九・一二～一三）

エリアがまず来なければならないという必然性を主張する律法学者達に対して、三人称複数で、すでにエリアは来たのに、彼に対して「彼らの欲するところを彼らはなした」（一三節）と言われるとき、このアポフテグマは、すでに来臨したエリアを拒絶し、彼を殺したのは当の律法学者達自身であると主張することとなっている。

マルコはエルサレムの律法学者を最高議会の一員としてイエス殺しの主役の一人と数えているので、これはマルコの文脈ではユダヤ教指導者達を包括的に批判しているものと理解できる。エリアには元来、「主の日」の前に登場して、イスラエルの各部族を「建て直す」ことが期待されていた。それによってイスラエルに対する審判の回避が期待されるはずであった（マラキ三・二三、二四）。しかし彼らがそのエリアを拒絶したことは、イスラエルには、もはや審判回避の希望はないことを意味する。

マルコはこのエリアの受難の告発の中に、彼らによって捨てらるために起こる人の子の苦難の必然性（八・三一）

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

を、はめ込んでいく。これによってエリア拒絶に優る、イスラエルと神との関係の上で決定的な出来事が引き起こされていく。これは最高議会の裁判の中で、イエスが彼を殺そうとするユダヤ教指導者達に対して、審判者としての彼の来臨を告げることと対応する（一四・六二）。エリアとしての洗礼者ヨハネを拒絶し、そして何よりもイエスを拒絶したイスラエルには、もはや神の救済史の中で神の選びの民として特別に与えられていた特権は残されていないのである。

結び

マルコ福音書の中で、イエスを信じる決断をし、その後に従う弟子たちは、イエスの生前、彼から特別な秘密を開示された人々であり、復活節後、新しい神の国の担い手として、いわば全世界・全国民の間での福音宣教を押し進めていく。この彼を信じる小さい群れから、やがて終わりの日に神の国が完成していくところに神の国の秘密（四・一〇）がある。

これに対して、イスラエルの民の中の、ユダヤ教指導者達は、一貫してイエスの宣教を拒み、彼と対決して、最後には殺してしまう。彼らからは、神の民としての救済史的特権は奪い取られ、やがて終わりの日に、人の子の裁きの前に立たされる（例えば一四・六二）。

この間にある群衆は、両者の中間的な存在であり、彼らの中からは、イエスを信じないで、ユダヤ教指導者の側に立つ者たちと、彼を信じて、弟子達の側に立ち、やがて、広義の弟子達となっていく者達がいる。いわば、イエスの宣教を通して、群衆の間に「分化」が起こっていくのである。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

注

(1) 本稿は、最初、特に前半の概略を一九九〇年六月一八日にプール女学院短大において開催された関西新約学会において、更に、後半の細部も含めて一九九〇年九月一八、一九日に明治学院大学において開催された日本新約学会において口頭で発表したものに基づく。日本新約学会理事会にはその発表を学会誌『新約学研究』に掲載することを推薦していただいた。しかし、色々な事情が重なったため、同学会事務局のお許しをいただいて、本稿を恩師小林信雄先生への献呈論文として『神学研究』に寄稿させていただくこととした。

小林先生は、当時、ゲッティンゲン大学におられたU・ルッツ先生の下で学ぶことを希望した私のために、仲介の労をとって、私の留学の道を開いてくださった。そのことを筆者はいつも感謝をもって覚えている。

また、ここで城崎進先生に対しても感謝したい。神学部一年生の頃、前期試験の直前に突然の病気で入院することとなり、教務主任であった先生に親切なご指導を受けたことを思い出している。

(2) 日本新約学会での発表の折に、ochlosを「民衆」と訳さないのか、との質問をいただいた。確かに、この語は、マルコにおいて、ユダヤ人指導者との対比で用いられるときなど、民衆とすべき面がある。しかし、同時に、やはりイエスのまわりに集まった人々として「群衆」と訳すべき面があるので、本稿では群衆とした。

(3) 大貫隆氏の「マルコの民衆の神学—安炳茂氏との対話」、『民衆が時代を拓く』一九九〇年、新教出版社刊が、筆者と類似の問題を取り上げていることを、学会の折に、同氏より指摘された。大要においては共通するようであるが、細部は異なる点が少なくない。そのあたりも本稿の中で論じるべきであったが、後日を期したい。

(4) 船による渡航は、マルコが物語を結びつけるのに好んで用いる動機である。例えば五・一、一八参照。ここでも八・一三は八・一〇を受けている。

(5) これについては拙論「二つのパンの奇跡とマルコのキリスト論について」、『神学研究』第三五号（一九八七年）所載を参照。

(6) イエスを殺そうとするエルサレムの指導者の手先としてここで再びパリサイ派とヘロデ党が登場する。

(7) マタイ一六・五は「ヘロデのパン種」を「サドカイ派の」それに修正し、一六・一～一二でパリサイ派とサドカイ派の教えに対する警句と説明している。ルカ一二・一はこれを省略し、「パン種、即ち偽善である」と注釈している。

(8) マルコ一一・二七～一二・一二、一四・四三、五三。

(9) これはH. Conzelmann, U. Luzなど、最近ではJ. Gnilkaなどによって広く主張されているマルコ福音書のキリスト論的解釈である。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

(10) マルコ一一・二七〜一二・一二、一四・四三、五三参照。
(11) マルコ八・三八、一三・二六、一四・六二参照。
(12) 後述。
(13) proskaleisthai はマルコに九回と比較的多く用いられ（マタイ六回、ルカ四回）、一五・四四以外はイエスが弟子たちや群衆などを呼び寄せる場面で使用され、その中の三・二三、七・一四、一〇・四二、一二・四三はここと同じくイエスが教える場面を設定するために用いられている。
(14) マルコの to euaggelion の使用は特色的であるが、特にこの語が一〇・二九、一三・一〇において、ここと同じく henken emou に付加されていることが重要である。
(15) この導入句は四・二、二一などでも用いられている。
(16) マルコ九・三〇参照。
(17) 四章と七章について前述した箇所参照。
(18) 一・四四a、七・三六など多数。
(19) 受難予告の主語「人の子」と結びの「復活する」(anistanai) から作られたと思われる。すると「人の子が復活するとき」という表現によって、八・三一でいわれている復活に至るまでのイエスの受難のすべての歩みが顧慮されているとみなしうる。
(20) 例えば八・一六以下、一〇・二三以下など参照。
(21) 一四・九も参照。
(22) これについては拙論「百卒長の過去形での神の子告白について」、『聖書と解釈』第二三号（一九八三年）所載を参照。

NII-Electronic Library Service